
ツンデレ（仮）

天野 雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツンデレ（仮）

【Nコード】

N7310D

【作者名】

天野 雀

【あらすじ】

高校入試。会場で出会った少女は初恋相手！？でも、そいつはとんでもない性悪女で……。

1（前書き）

（仮）です。

完成、推敲が終わりましたら本文を完全に入れ替えます。それでも感想、批評等くださればとてもうれしいです。

この話は某ライトノベルのプロットを土台として使わせていただいた実験作です。予めご了承ください。

なれない教室なのだ。

なれない雰囲気だったのだ。

いくら俺がバカだったとしても、バカなりに緊張していたのだ。

なんといつても高校の都立受験当日だ。親や先生なんかは人生の分かれ目なんて言うし、さくらはひと足先にここを推薦で決めちゃうし。俺は俺なりに焦っていたのだ。

たえ昨日の夜、友達の合格祝いで酒盛りしていたとしても。

俺なりに焦っていたのだ。

そんな俺が、席をひとつ間違っていたとしてもしかたがない。

そう思うだろう？

だが、奴はそうではなかった。

……そう、奴は前からやってきた。

均等に並べられた机の間を歩いていた。長く整ったまつ毛をおとし、手にした受験票と机にはられた番号を見合わせながら。小さな口元は確認するように机の番号をそっとつぶやく。そうして、だんだんと俺のほうへやってくる。

気づいた時には目が離せなくなっていた。

とんでもない美人だった。彼女が通った道からはため息さえ聞こえてくる。そのため息は男子も女子もなく、ただただ見る者を圧倒するような美しさだった。長い亜麻色の髪を背中の中ほどまで伸ばし、その髪はまとった雰囲気を実現するかのごとくクセひとつなく凛と背筋を正していた。

その彼女が、俺の席の横で止まる。

目を離せないでいた俺は、彼女と目が合った。

大きな瞳だった。

ただとげとげしくつり上がった目元だけが、印象とかみ合わずどうにも違和感を覚えた。

俺はただ、バカみたいに開いた口をふさぐのも忘れて呆けた顔で彼女の顔を見つづけた。

「そこ、わたしの席なんだけど」

「え？」

「だから、わたしの席」

彼女は自分の番号を指して言った。

俺はあわてて自分の受験票を確認する。

——ほんとだ。ひとケタずれてる。

「わ、わりいな」

俺は自分の荷物を片付けると席を立った。

「……………いいえ」

彼女は本当に気のない一言だけ言うと、席に座った。

その、冷めた雰囲気にはやはり違和感を感じた。

それでも、言わずにはいられなかった。

目が離せなかったのは決して彼女が美人だったからではない。

似ていたのだ。

初恋の相手に。

小学校の卒業式の日、引越してしまった穂積 遥ほづみ はるかという

少女——一方的な知り合いでしかなかった彼女に、とても似ていたのだ。といっても、当時の彼女はこんなとんでもない美女ではなかったが。

と、そんなことを考えていると彼女が席から上目遣いに睨んでいた。

「なに？」

淡々とした声の調子に少し気おされる。

どうやら呆けていたらしい。

しかし、見れば見るほど彼女である。しかし、同時にこんな雰囲気きふきの少女だったろうかという疑問がちらつく。俺の知る穂積遥はも

つとしおらしい少女ではなかっただろうか。
それを確かめるには、聞くしかあるまい。
「だからなによ」

彼女の視線はますます険しくなっていく。

俺は決意を固めるように、つばを飲み込んだ。

「ごくり、という音が耳の置くまで響いた。

「なああんた、俺とさ、どっかで会ったことないか？」

とても、勇気のいる一言だった。

だって彼女の視線。今にも「邪魔。死刑」とでも言いそうな、幼稚園児さえも殺すことをためらわなさそうな極悪色なのだ。

平静を装って話しかけられた俺に、都は表彰状を送ってもいい。
ところが、

「はあ？ なに、あんた受験会場でナンパ？」

当の彼女は死刑よりももっととんでもないことを言っていた。
もとよりささやき声しかなかったクラスが、沈黙した。

「ち、ちが……」

「わたし、始まるまで少しでも自習したいから、あっちいつても
らえます？ ナンパさん」

しっしっ、と手で俺を払うと、自分はさっさと参考書を広げてい
た。

「やだ、受験会場でナンパだってえ」「お前はよくやった。G
J!!」「ていうかあー、がつつきすぎじゃねー？」「おれ、さす
がに引くわ」「キモい」等々。

試験直前で静まり返っていた教室では今しがた行われたナンパ宣
言は全員にしっかりと聞かれていた。先ほどまでの静けさはどこへ
いったのやら、今ではひそひそそこそそと友達同士で来た連中や即
席の仲間を作った連中がささやき合っていた。

ふふふ、ここまで俺を怒らせた奴は久しぶりだ。うふ、うふふふ

ふふふふ。

などと俺は自分のボルテージを上げていた。

足は動かず、つまり奴の目の前で突っ立ったままだ。

奴ひとりだけは何事もなかったかのようにぺらぺらと参考書のページをめくっている。

そしてついに、俺のゲージが溜まりきったその時！

「……おい、てめーら席に着け。試験おっ始めるぞ」

なんだか声だけやたら渋い中年のオヤジが入ってくる。

怒鳴り込もうとした瞬間、試験監督が入ってきたため俺は勢いあまって床へ突っ込むのだった。

それにより俺はさらにクラスを笑いの渦へ巻き込んだ。

……嬉しくねーよ、バーカ。

そんなことはともかく！

前言撤回だ。あいつが穂積遥なわけがない！

俺の初恋相手なんかでは、断じてないのだ！！

「穂積^{ほすみ} 遥^{はるか}です。よろしく願いします」

ズザー！

俺は頭から勢いよく床へ突っ込んだ。

クラスからはくすくすと笑いの声がもれる。

くそ、笑いたきゃ笑えってんだ。

あの日から約二ヶ月。

ついに始まった俺の高校生活初日は見事に最悪の日となった。

どれもこれも、全ては目の前に座るこいつのせいだ。

倒れた椅子を立て、席に座るが周りの視線がとても痛かった。ガ

ラスのハートにぶすぶす刺さる。ああやめて、ナンパ野郎と蔑まな
いで。目立つのは好きだけど、冷たい視線はトラウマなんだってば

「山崎？」

ダンディな声が俺を呼んだ。

担任だった。

「は、ハヒ！？」

ボタン、と再び椅子を倒しながら脊髓反射で立ち上がった。

「自己紹介。お前の番、な」

中年太りのおやつさんは、外見に似合わない渋い声でクールに言
った。

周りを見渡せば、皆がこちらを見ていた。ある者は好奇の目で、
ある者は汚いものを見るような目で。目の前の穂積以外の全員が、
こちらを見ていた。

少し気まづくなつてほほをかいてみる。

「あ、えっと」

視線をクラスの右端へ向けると、そこにはいつもの無表情でこち
らを見ている幼なじみの相川^{あいかわ} さくらと目が合った。

照れ隠しに笑ってみせると、わずかに眉が動いた。

……まず。

付き合いの浅い人間にはまず分からないだろうが、今のさくらは
どうやらかなり機嫌が悪いらしい。

俺は軽く目を閉じ、小さく息をはく。

冷たい視線は大嫌いだ、注目されること自体は別に苦手ではな

い。

「山崎^{やまざき} 友介^{ゆうすけ}です。得意なことは騒ぐこと。苦手なことはひとりで
いることです。よろしく！」

そういつて笑ってみせた。

穂積は相変わらず興味すら示さず、綺麗な茶の髪を俺へ見せびら
かすだけだった。

そんな時、俺の右隣の席から野次が飛んだ。

「おいおい、特技はナンパじゃねーのかー？」

見るといかにも軽そうな金髪野郎がニヤニヤと笑っていた。受験の日のことは初日の今日ですっかりウワサとして広がったように、俺はすでに尻軽男の烙印を押されているのだった。

再びクラスがくすくすという意地の悪い笑いにつつまれる。

俺はその笑い声を聞きたびに、きゅっと心臓を締め付けられたような気持ちになる。

だから、その気持ちを跳ね飛ばすために金髪野郎へ言ってやる。

「うつせー。文句あつか！」

金髪はククツつとのどの奥で笑うと、文句はないとばかりに手をパタパタと振り、俺から視線を外すのだった。

その意地悪そうな横顔に、心臓を締め付けられるような嫌らしさは感じなかった。

結論から言おう。

俺の女子受けは最悪だった。

どうやらクラスには現場にいた人間が何人かいるようで、しかもあの現場は傍から見れば言い逃れできるようなものではなかった。転がってきた消しゴムを拾ってやったのに、まるで獣を見るかのような怯えた目でこちらを見られ、しかもそのあと仲間の女子に近づかないでよね、なんて言われた時は裸になつて暴れてやるうかとまで思った。

逆に一部の男子からは勇者とまであがめられ、御利益とかいってぺたぺた触られた。

超嬉しくねー。

それもこれも、全部全部全部！俺の目の前に座るクソ女、穂積遥のせいだ。

「ナンパあ？（声マネ。高音キー）」だとう？ 自意識過剰もたがいにしやがれ！

誰がお前のような性悪女に声などかけるものか。

こっちから願い下げだ。

しかし、ここまでくるとどうやら俺の初恋相手であることは間違いないようだった。

休み時間、さくらに聞いてみればやはり小学校が同じだったと言っていた。昔、病弱で休みがちだったさくらのことを穂積の方は憶えていないようだったが。

それにしても、だ。確かに彼女だとは分かるのだが、それにしてもものすごい変わりようだった。

昔も、確かに可愛かったとは思う。

だが、俺の知っている穂積遥はださいメガネをかけていたし、髪も漫画に出てくる委員長キャラみたいにごっつい三つ編みだった。どちらかと言わなくても物静かな感じで、いつも文庫本を持ち歩いている印象があった。クラスは一度も一緒になったことはない。好きになって一年に満たない短い時間、遠目から眺めているだけだった彼女はそんな雰囲気少女だったのだ。

それがどうだろう。

三年ぶりに会ってみた彼女は、あろうことが同じ小学校のなつかしい相手（つまり俺）の声かけをナンパ扱いし、クラスの笑い者にするような悪女に成長していたのだ！

これはもはや詐欺のレベルだ。

人間がたった三年間でここまで180度変わるものだろうか。

否、断じて否だ！！（反語法）

つまり俺は黙れさせていたのだ。

三年と数ヶ月前のあの日、すでに仮面の下に悪女の魂を持った魔女に、騙されていたのだ。

そんなことにも気づかず純粋な俺は初恋の甘酸っぱい想い出として大切にしまい込んでいたのだ！

「で、それをボクに聞かせてどうしようってんだよ、友介」

いやになれなれしい金髪——もとい元木^{もとぎ} 悠矢^{ゆうや}が言った。もといモトキとはなんと言い辛い。悪意すら感じるな。

「ちよつと黙れバカ。人がせつかく相談に乗ってやってんだから、少しは落ち着けハゲ」

今は帰りのH^{ホーム}R^{ルーム}の時間。入学式のあつた今日は昼前に下校なのである。しかしうちの担任^{おやつさん}はなかなか現れず、クラスはすっかり新しい友人同士のおしゃべり会になっていた。

俺は机を大げさに右へよせ、悠矢と話しているのだった。ちなみに悠矢はあの自己紹介の後、気に入ったあのよろしくだの言いつつ強引に下の名前で呼ぶように迫ってくるのだった。まさかホモか。
「死ぬか？」

と、言いつつすでに拳が顔へめり込んでます。

「い、いふあいれす」

「あつと、わるいね。それにしても、お前のその間抜けなモノローグを口に出してるクセ、どうにかなんねーのかよ」

「ふふふ、これは実は重大な伏線なのだよ、元木クン」

このクセはさくらにもよく突っ込まれる。

どうやら俺はたまに考えていることを口走っているらしい。はた迷惑な。

「それはこっちの台詞だバカ」

「勝手に人のプライバシーを覗かないでください。じ、人権震撼で訴えるぞ！」

「勝手にさらして勝手に訴えてんじゃねーよ!!」

「ちなみに人権は侵害だ。震撼つてなんだよバカ」

「テメーの間違いだろ!？」

「そんなに高校生とか恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしそうに頬染めながらなにのたまってますかー!？」

ちなみに悠矢は軽そうな頭をしておきながら頭がいい。ウワサでは入試じゃ一位通過だったらしい。金髪のくせに。

「なに楽しそうに騒いでるのよ。私も混ぜなさい」

そして、さらに一名。試験こそ受けずに推薦でさつさと決まっていたが、テストを受ければ悠矢すらも押さえたであろうとウワサされる我が幼なじみ、相川さくらがやってきた。ちなみにウワサといってもおやつさんがさっきの時間に自慢していただけだが。

さくらは無表情を崩さず、小柄な体に不釣り合いな不遜な態度で腕を組みながら俺たちのところまでやってくるのだった。

これがもう少し恥ずかしそうに幼なじみの俺のところまでやってくる、というのならもっとずっと燃えるシチュエーションだったろうに。

「友介くん。あなた、今すぐそこから落ちて死ぬべきだと思うわ」
さくらは前髪を後ろへ流しながら眉ひとつ動かさず言った。

どうやら俺はまたなにか口走ったらしかった。

「よお相川。ヒマさえあれば幼なじみのところへくるとはなかなか殊勝な通い妻だな」

悠矢はククク、と下品に笑う。

「ええ、あなたさえ居なければ最高のシチュエーションだったでしょうね」
さくらは騒がしいクラスを見回しながら言った。

「まったくだ」

悠矢は心底楽しそうに相槌を打つ。

そして、

「んで、お前らって本当に付き合っていないのかよ？」

「ええ、付き合っていないわ」

「ただの幼なじみだぞ」

まったくの同時に答える俺たち。さすが幼なじみ。

「へええ。まったくそうは見えないけどねえ」

「相手が唐変木だから一筋縄にはいかないの」

？

「ククク、ああ、なるほどねえ」

??

片やニヤニヤと、片や無表情で話す二人。

「……なあ、唐変木ってなんだ？」

その二人はその言葉に同時にこちらを振り向く。
ニヤニヤと。坦々と。

「う、な、なんだよ」

対照的な二人は、全く同じ調子で、

「お前のことだよ」
言った。

さらに待つこと数分。

ようやくおやつさんが教室へやってきた。

そしてHRなわけだが、やることと言えば明日の予定を伝えるだけなのでものの数十秒で終わってしまった。待ち時間のがなげーよ。本日さっそく決まった委員長が号令をかける。

クラス全体がそれにあわせて頭を下げる。頭を上げればそこに待っているのは高校生活初の放課後だった。

担任はなにを急いでいるのか、号令がすむとさっさと教室から出て行った。

それをきっかけにクラスはだんだんと放課後の色に染まっていく。手早く荷物をそろえてクラスを出て行く者。さっそく新しい友達同士携帯のアドレスを交換する者。遊びの約束をしている者。さまざまである。

その色彩の変化は腹立たしいことに俺の目の前でも行われていた。

「えー！ 穂積さん携帯持ってないのー！？」

「……うん」

「ねえねえ。じゃあ今から駅前の新しい喫茶店みんなで行かない？」

「あ、いい。それいいねー」

「いこいこー。みんなで」

「うん、いいよー。穂積さんも来るよねー？」

悪女の周りをさらに派手な連中が五人で囲んで騒いでいた。クラスの姫君を仲間に取り込みたい連中だった。

お祭り好きの俺としてはうるさいとは思わないが、穂積がちやほやされているのはなんだかとも虫がアレだった。ほら、アレだアレ。

「虫の居所が悪い、ね」

「そう、それ」

「どうでもいいけどクラスの真ん中でクネクネ悩まないで。キモいわ」

そんなことを言いながらさくらが後ろのほうからやってくるのだった。

そんな時、

「えー!!」

「うそー」

などなど。他にもあと三つほどの悲鳴が重なった。

見ればどうやら穂積が五人の誘いを断ったらしかった。

「……ごめんなさい」

穂積はもう一度、断りの言葉を言った。それはすまなさそう、というよりももつとずっと冷ややかな拒絶を含んでいた。

「そ、そっかー。用事があるんじゃないよねー」

どうやらリーダー格と思われるひとりの女子が言った。

それを合図に他の四人もわらわらとまた今度ね、などと言いつつ移動していくのだった。恐るべき統率力である。

当の穂積はさっきまでの切迫した雰囲気はどこへやら、集団がさった瞬間にはすっかり連中から興味を失ったようで、まだ声をかけていた五人に背を向けるとそそくさと片付けを始めていた。

フン、高嶺のロンリーウルフってか。

「それ、混ざってるわ」

「あとボク的には聞こえてると思うんだけどね」

支度を終えた悠矢が楽しそうに付け加えた。

見れば穂積は俺の方を睨み付けていた。

美人の怒った顔つてのはなかなか迫力のあるものだ。

開かれた彼女の瞳には、逆さまに写った俺の姿が見えた。

「さっきからコソコソとなんなの、ナンパさん。逆恨みなら結構よ。間に合ってるから」

穂積が冷え切った声で言った。

つい今朝方までの俺ならフリーズしちまったであろう冷たさだった。だが、南極用防寒具を身につけた今の俺の敵ではない――！！

「ださいわ」

「ああ、だいぶ、な」

黙れ、外野。

ちよっぴり恥ずかしかった。

「ふざけてるの？ わたし、あなたみたいになちゃらちやらした人、大嫌いな。帰るわ」

「待て！」

学校指定の濃紺のバックを肩にかけ、こちらへ背を向けた穂積を制止する。

きさまの孤高主義はよく分かった。

きさまが綺麗なのも認めよう。

それは否定できない事実だ。

だが、

きさまはほんの数年前まではださメガネをかけ、ださい髪型をしていた地味子なのだ。

中学校でなにかあったかは知らないが、きさまのカリスマなんてのはたかが数年程度の付け焼刃なのだ。

あんな派手派手な連中にワイワイキヤイキヤいわれてチャホヤされてしまうような存在ではないのだ。ただの性悪根暗女なのだ。そして、それを白日の下にさらすか否かは俺の意思ひとつなのだ。

つまり、

「俺は……おまえのヒミツを知っているぞ……！！」

その一言は劇的だった。

穂積の顔は青くなっただかと思うと真っ赤になり、最後には下唇と悔しそうにかみ締めた。

そして、まるで親の仇でも見るかのような恐ろしい、さっきまでとは比べ物にならない鋭さで俺のことを睨むのだった。

その瞳に、俺は後ずさりそうになる足を強引に縫いつけた。
やがて唇を震わせつつ、穂積は低くうなり声をあげた。

「あんだって……」

おう、なんだ。

「最、低」

少しだけ、グサリときた。

穂積はそれだけ言うと、クラスをズンズンと出て行った。

後に残ったのは俺たちだけだった。

まあなんにしても悠矢とさくらから伝授された必殺技は見事にクリティカルヒットしたのだった。

そんな時、悠矢がポツリと言った。

「なあ、ボク今ちよっと思った」

「奇遇ね。私もちよっと思ったわ」

なんだよ。

『最、低』

ぶっ殺すぞ、てめーら。

入学式から数日がたった。

緊張と初めての連続だった日々はだんだんと薄れていき、それぞれがそれぞれの楽しみ方を覚え始めていた。

昼休みの今も、さまざまな組み合わせの見られた初日や二日目に比べ、最近ではとりあわせに安定が見られる。気の合う仲間が分かってきた証拠だった。

かくいう俺も、おとといあたりからは悠矢と田中と山田というメンツでよくつるんでいた。それにしてもひどい苗字である。

「……………」

「……………」

なぜか、二人がじと目で俺のことを睨んでいた。

「いや、でも山田太郎はさすがにボクも傑作だと思っぜ？」

悠矢はククク、と独特の下品な笑いをこぼす。

「しゃーねーだ口、親がつけたんだから」

そう答える山田は実はイギリス人のハーフで、長身と甘いマスクのナイスガイなのだから世の中なにが起こるか分からない。横断歩道では是非右見て左見て上くらいは確認するべきだろう。

「なにが落ちてくるんだ？」

と悠矢。

「人工衛星じゃナいのか？」

「隕石とかにしねえ？」

「地球侵略しにきた宇宙人！」

山田、俺、悠矢が次々に落ちてくるものを上げていく。

「もうちょつと人に迷惑のかからないものにしようよ……………」

そして田中は困ったような顔ではにかむのだった。

そんなこんなで俺らはクラスの真ん中で机をつき合わせながら、購買のパンや弁当を食いながらバカ話に花を咲かせるのだった。

ちなみにさくらはなぜかクラスの女子に猫可愛がりされていて、現在は学食に拉致されていた。俺くらいにしか分からない困った表情をしながら、傍目には無表情のまま台風のような連中に引きずられていったのだった。無表情は無感情にあらず。感情表現の苦手なあいつを、さわがしい連中の方から巻き込んでくれるのは、俺にとっても嬉しいことだった。

「おい、顔がにやけてるぞ。何かいいことでもあったのか？」

ニヤニヤ顔がデフォルトの、しかし普段よりじつとたちの悪いニヤニヤを深めた悠矢だった。

むう、そんなに変な顔をしていただろうか。

「ナんだ？ さっそく彼女力？」

「ばっ……！ そんなんじゃないよ」

「おお！？ 顔が赤くなっただぞ。タロー、たたみかけろ」

「イエッサー、ボス」

「やめなよ二人とも。山崎くんがかわいそうだよ」

手をわきわきさせながらにじりよる悠矢と山田、そしてそれを止める田中だった。

そんな時、

「……む」

俺の横——クラスの前方から視線を感じた。

俺が急いで振りむくと、今度は目が合った。

だがそれも一瞬のこと。

目が合った穂積はあわてて目をそらすのだった。

これがあの悪女でなかったらどれほどよかっただろう。視線を感じたのは一度や二度ではなかった。入学式以来この数日間、ことあるごとに穂積の視線を感じるのだった。

これが穂積の視線でさえなければ、お、俺、もしかして惚れられてる……！？ 困る、困るけど……ぼっ……！！ なんて展開にもなったかもしれないのだ。

だが、実際に向けられる視線はそんな嬉し恥ずかしラブラブ光線

とはほど遠い。なぜならたまに合う目はつり上がり、射るような強い眼光を放っているのだ。これが求愛行動に見えるのであれば、是非良い眼科を紹介しよう。あえて表現するのであれば、あれは敵意だろう。にしても学校にいる間中感じるのには腑に落ちない。悪意をぶつけるだけなら目が合った瞬間だけですむはずだ。これではまるで俺のことを監視しているようではないか。

今度はこっちが観察する番だとばかりに穂積を睨みつける。

今はこちらに背を向け椅子に行儀よく座っている。

ダミーのつもりか、本まで広げていた。

昼食はとりおわったようで、弁当箱の袋が机の横へかかっていた。もちろん、ひとりだった。

彼女は初日の拒絶以降もあの派手なグループとはちぐはぐな会話を続けていた。

穂積は俺以外には聞かれれば答えるし、必要とあれば話しかけてくるが、それでもどこか人を遠ざけるような節があるようだった。

「……、……………崎つてばよ！」

「え？」

振り向くと、眼前には手が迫っていた。

「いゝ！？ ……つてえ」

驚くまもなくデコピンをくらう。

デコを押さえて前を見ると、悠矢がため息をついて腕を組んでいた。

「なんだあ？ さっきの変な顔は穂積遙絡みだったのかよ」

「いや……、それだけは絶対ないから」

俺はうずく額をさすりながら、もう一度だけ穂積の背中を見て、言った。

さらに数日がたった。

土曜が過ぎ、日曜は悠矢の家へ突撃し、週はあけ月曜日がやってきた。

突然だが俺は学校が大好きだ。

ありきたりだが友達に会えるからだ。

自分のあり方しだいでは毎日が祭りのように騒ぐことが許される場所だからだ。

社会がどんなところかは知ったこっちゃないが、きっと今よりはずっと退屈なところだろうという予感だけはある。

だから、俺は学校は大好きだが社会にでるための準備である授業は大嫌いだった。

どうだ、ガキのようだろう。うはは。

だが、俺には授業なんかよりもずっと嫌いなものがある。

それは俺の楽しい楽しいスクールライフを退屈でつまらないものにしてしまう“敵”だ。

たとえば、それはこんなルーズリーフの切れ端なんかだったりするわけだ。

“それ”は教師の声とチョークの音しかしなかった古典の時間に、後ろの男子から回ってきたのだった。

教壇の上からはダルマがメガネをかけたような教師が、平安時代かそこいらへんの古文を朗々と読み上げている。

俺はもう一度、回ってきた紙切れにかかっている文面を読む。

——穂積がムカつく奴。

その下には人数をかぞえる正の字がびっしりと書き込まれていた。

——ひとり十票まで♪

可愛らしくピンクで彩られた音符が、俺の目にはあまりにも禍々しく映った。

確かめなくても分かる。

これを書いたのはあのリーダーだ。

いつまでたつても自分になびかないお姫さまに業を煮やした女王が、ついに己の権力にものをいわせようとした、といったところだろうか。

しかし、紙の下を見て俺は思わず笑ってしまう。

——そうでもないやつ」

意外なほど達筆で書かれた字の下には正の字が二つ、並んでいた。ダルマが再び板書を始めた時を見計らって、俺は右の席を見た。そこにはシャーペンをもつ毛になんとか乗せようと奮闘している悠矢の姿があった。

……乗るわけねーだろ、バーカ。

そう思いつつ、手元の紙へ視線を戻した。

そして、シャーペンを取り出して俺もそこへ正の字を書き足す。

——そうでもない奴」

……。

なんか悔しいので残り五票は「ム力つく奴」に入れておこう。

——穂積がム力つく奴。

「……………」

書き込んでから、なんだかそれも腹ただしくなってきた。

俺は確かに穂積遥にむかっていた。だが、それはこんな風に他人によって形にされてしまうようなものではない。俺は俺個人の感情で、穂積にむかっているのだ。

そして、俺は俺の“敵”を憎んでいた。

この紙は、その“敵”そのものだった。

あのリーダーが憎いわけではない。穂積遥は確かに腹の立つ奴だ。だが俺は“敵”が憎かった。

その感情に任せて、俺は紙をくしゃくしゃに丸めて机の中へつつこむのだった。

やがてチャイムがなった。

「手紙、見せてちょうだい」

「は？」

それが初めて穂積から話しかけられた言葉だった。

ナニ訳ワカンナイコト言ッテンデスカ？

穂積は古典の授業が終るとすぐに立ち上がり、振り向き、こちらを見下ろしながら高圧的にそう言い放った。

「さっき、授業中にまわってたでしょ」

「……………」

やっとなにを言われているのかが分かった。手紙、とはつまりさっきの切れ端のことだ。そういえば女子なんかはよく授業中に回る紙を手紙と呼ぶ。

「あんだが今持つてるでしょ」

席に座ったまま見上げた穂積は、とても透明な目をしていた。

正直、おまえは背中に目がついてるのか！？　とか半ば本気で思ったのはナイショだ。

「ちよつと、聞いてんの。あんだ」

「あ、いや……………」

透明だった瞳が、いつものようにつり上がりみるみるうちに怒りの色に染まった。

かと思うと穂積は俺の机の角に手をやると、自分のほうへ強引に回転させた。

「いつてえ……………！！」

その時、机の足が俺のひざを強襲した！　ってかなにしゃがんだこの暴力女……！！

穂積は勝手に俺の机の中をがさごそとあさり始める。

いゃん、えつち。

じゃなくて！

「なにすんだよ」

俺は慌てて机をひったくる。

しかし、その時にはすでに穂積は目的のものを手に入れていたらしく、机はあっけなく俺の元へ帰る。

穂積の手元には一枚のルーズリーフ。
いや、くしゃくしゃに丸められたルーズリーフの切れ端が握られていた。

スツと、血の気が引いた。

そして、どうやらそれは俺だけではなかった。ピタリと、あれだけ騒がしかった休み時間のクラスから喧騒が消えたのだ。

となりのクラスで男子の騒ぐ声が、いやに遠くから聞こえた。ドクン、ドクン、と血の逆流する音が聞こえる。

そんな中、彼女だけが動いていた。

丸まった紙をほどくと、手で軽くアイロンをかけ、書かれた文面を目で追っていく。

その目は、たった一秒で動きを止める。

当たり前だ。あそこに書かれている言葉はたった一言だ。

そしてそれは他でもない、穂積への“悪意”だった。

一秒がたち、二秒がたった。

誰も動かない。

穂積も動かなかった。

そして四秒がたち、五秒がたった。

そこでふと、穂積は目を閉じた。

泣くかな、と俺は思った。

だが穂積は泣かなかった。

再び目を開いた穂積の瞳の奥には決意の光があった。

今だ穂積以外は誰も動けないでいるクラスの中を、穂積はツカツカと歩いた。ルーズリーフの切れ端を手に、教室の最奥、窓際の席へ歩いていった。

そして、あのリーダーの前へたった。

クラス中の視線が、そこに集まった。

「な、なによ」

対する穂積は冷静だった。

あくまでも、見た目だけは。

だがそれは見た目だけでしかなかった。

穂積は勢いよくルーズリーフをリーダーの机へ叩き付けた。

バシンツ、という音が響いた。

そして、

ピシャン……………！！

穂積が、リーダーの頬を張った。

「……………っ!？」

リーダーはなにが起こったか分からないようだった。おそらく、手紙のことを糾弾されるのだと思っていたのだろう。そして、それならいくらでも言い逃れられると思っていたはずだ。だが、実際は一言もなく、ただ穂積は手を上げたのだった。

リーダーはただただ、張られた頬を押さえながら呆然と穂積を見つめていた。

対する穂積は、

「フン」

満足げに鼻を鳴らすと、踵を返し、クラスを出て行ってしまった。瞬間、手を離れた風船のようにクラスは騒がしさを取り戻した。

「大丈夫!? カナちゃん」

「なんなの、あいつ」

「手上げるなんてサイテー」

「感じワルい」

——この瞬間、クラスのなかでひとつのルールができる音が聞こえた。

とりまきの四人はあわててリーダーを囲う。リーダーも、どうやら音ほど強く叩かれたわけではないようで、仲間には大丈夫大丈夫と笑って見せていた。

そして他のクラスメイトたちも、

「こ、こえー」

「あの程度で殴るとか、超ヤンキーじゃん」

「穂積さん……、ひどい」

「どうしよ、あたし席近いんだけどー」

口々に穂積の行動について意見しあっていた。

だが、その内容はどれも好意的なものはなく、あるはずもなかった。

リーダーは穂積の出て行った扉を恐ろしい形相で睨みつけていた。
「ありやりや、あの子もなかなか思いきりのいいことするねー。ま、ボク個人としてはスツとしたけど」

悠矢が話しかけてきたが、俺は穂積の出て行った扉から目が離せなかった。

こうして、穂積はクラス内での孤立を確たるものとしてしまった。
俺は、あの時泣いてしまえばよかったんだ、と確証もない予感を抱いていた。

騒ぎのあった昼休みも終わり、二次方程式に頭を悩ませた五時間目も終わり、本日最後の授業はおまかね、体育の授業だ。

学期始めの退屈な身体測定も終わり、今日からはサッカーをやるらしい。

サッカーをフルコートとれるかとれないかくらいしかない校庭の端の方、体育倉庫の前にクラス全体が集まっていた。

にしてもトタンの掘立小屋が体育倉庫とか、どんだけ金に困ってるんだこの学校……。

準備体操も終わり、今はそれぞれがリフティングやパスなどボールを使ったアップをしている。

見れば悠矢もかなり軽やかにリフティングをしていた。

「経験者、か？」

俺も負けていられない。話しかけつつリフティングを開始する。

「まあ。小学生の時に少しだけ」

悠矢はボールから目を離してこちらを向いて答えた。む、やるな。俺はひそかに対抗心を燃やす。

「なんだあ？ 勉強のできるボクは運動もできるのが悔しいか？」

「ぐは！」

バレバレでした！

「バカにすんな。お前より上手いに決まってるんだろ。俺は中学時代に先生たちから『お前。体育だけはできるのな』って褒められたんだぞ」

「褒められてねーよ！？」

失礼な。

あの時の先生方の優しい目つきを否定するなんて、なんて心の荒んだカワイソウな子なんだ。

「ぐああ、ボクは間違ってるはずなのに何故かすごくむかつくぞ

「!?」

「二人とも、そんなに激しくやりとりしてルのに、ボール落とさないのは素直にすごいナ」

「すごいすごい」

山田は呆れ顔。田中はしきりに感心しながら近づいてきた。田中、拍手は幼すぎないか。

「ま、なんだかんだアレには適わないんだけどな」

そんな二人に、俺は少し離れた女子の集団を指さした。……穂積が相変わらず孤立しているのは見なかったことにしよう。

「ナんだ？」

「なに？」

「？」

山田、田中、そしてリフティングを続けながら悠矢がそちらを見る。くそ、悠矢が止めれば俺の勝ちだったのに。

そして、

「すごい」

「あはは」

「……………」

女子の集団の中心ではうちの幼なじみがサッカーボールをリフティングでおてたま(……)していた。

ポロリ、と。それを見た悠矢がボールを落とした。よし、俺の勝ち。

あんなものが目の前な手前、言う気はさらさらないが。

「なんじゃありゃ」

悠矢がこちらに振り向きつつ言った。

そりゃ俺が聞きたい。

俺は目線の高さへ小さく蹴り上げたボールを、一定のリズムで蹴り上げ続ける。

「相川さくら。うちの高校の、入学前からのエースストライカーだと、さ!」

俺はリフティング中のボールを力任せに高く蹴り上げた。

俺にとって、学力では到底及ばない幼なじみに、得意な運動でさえ足元に及ばないというのは、ひそかなコンプレックスだった。

「変な奴だとは思ってたけど、ここまでくるとボクは確信したね」

「なんだ」

「あいつは変態だ……！！」

間違いない。

後方でなにかが落ちてきてトタンが割れるような破壊音が響いた気がした。

変態さんが女子組から外されるまで五分しかかからなかったのは、むしろ体育教師のフラインプレーと言えよう。

「私に変態なんて呼ばれなきゃいけない理由を三秒以内に原稿用紙三枚以上五枚以下で答えなさい。じゃないと蹴るわ」

「無理！？」

「あとそういうことは蹴る前にいつてやれ」

悠矢の言葉に顔をおさえてのたうちまわる俺はこくこくと頷いた。と、いうわけでさくらはサッカーの授業を男子組で受けることになったのだった。

「ごめん、誰かキーパー変わって……」。

俺は痛む顔をさすりながらのろのろと立ち上がった。まだひりひりする上、なぜか鼻がツーンとした。ツーンと。

これが幼なじみにすることかよ。

「これが旦那にすることか？」

悠矢が俺の気持ちを代弁してくれる。ナイスマイブラザー！。

「旦那じゃないわ」

「似たようなもんだろ？」

「愛の鞭よ」

「そこは否定しないのかよ……」

「だって好きだもの」

「……………は？」

絶句する悠矢。

慣れたといつても不意打ちされると俺もさすがに恥ずかしいぞ、それ。

「さ、さくら、あんまり軽々しく好きとか言わないほうがいいと思うぞ」

さすがの俺も目を合わせられない。

「軽々しくなんて、言ったことは一度もないわ」

さくらはこんな時でも表情を変えない。恥ずかしくないのだろうか。

悠矢はいまだに口を開いたままだらしい顔をさらしている。

「ふん。そうだ、ユウスケ。さつき先生があなたのこと呼んでいたわ」

「ん、分かった」

先生は、体育倉庫の前にいた。そちらに向かいかけて、

「俺も、お前のこと好きだぞ……」ピクン、と。さくらの表情が驚いたような、嬉しそうな色をほんの少しだけ浮かべる。「……幼なじみとして、な」

恥ずかしくて、最後のほうは背を向けつつ言った。そういう顔をもつとすればかわいいのに、なんて柄にもないことを思いながら。

その後は先生のほうへ向けて全力ダッシュだった。

なんて恥ずかしいことをしてしまったのだろうか、俺は。

元気がいいな、と笑顔に角を生やした体育教師は前置きした。そこには穴の開いたトタン屋根と、さっきまで俺のリフティングしていたボールがあった。あはは、と俺は笑った。ふふふ、と体育教師も笑った。ぶつちやけキモいっす、と正直に言ったら殴られた。なにすんだ。

しかし、どうやら俺は体育倉庫の屋根を壊したらしく、俺はさらなる鉄拳制裁と放課後に倉庫の中の掃除を言い渡された。むしろしゃしてやった、今は後悔している。

放課後。

「ボクは今、お前は死ぬべきだと思っている」

「がんばれヨー」

「本当に手伝わなくていいの？」

ああ、俺の不始末だしな。

「鈍いというよりポンコツだな、ポンコツ」

「怪我には気をつけろ」

「じゃあまた明日ねー」

級友との心温まるあいさつが終わり、倉庫の前へつくと制服のブレザーを脱ぎ、ネクタイを外してワイシャツの袖をまくった。

鍵は体育の時にあずかっている。

南京錠を外し、ガラリとたてつけの悪い扉を開く。

もわっとした、湯船を覗き込んだときのような、なのにやけにざらざらした空気が顔を襲う。

「うへ。けむ」

手であおぐようにして埃をはらう。

さすがホームメイド製。窓なんてありやしない。

さっさとしないと真っ暗になりそうだった。今だって、俺のあけた屋根の穴から差し込む光がなければ、もう少し薄暗いはずだ。

言いつかった仕事は散らかっている道具を整理して、掃き掃除をすること。

やると決まった以上、うだうだ言うのはなしにしよう。

それはきつと、楽しいことではないから。

「……………」

軽く、自分の頬を両手で打ってみた。

「よっしゃ、やるか」

「掃除するのに道具忘れてなにをするつもりなわけ？」

「うわあ!？」

突然の声に振り向くと、そこには穂積遥が立っていた。

さくらの感情の読み取れない表情とはまた違う仏頂面。剣呑な雰囲気を感じながらも放った彼女が、竹箒を二本持っているのだった。つい数時間前の昼休みに起こったことが思い出されて少し気まずい。

「先生が持つてけって」

穂積が箒をこちらへ突き出す。

「さ、さんきゅ」

それを受け取った。

なんだか初めてコミュニケーションがまともに成立した気がするぞ、俺。

俺に押し出すと、穂積は呆然としている俺におかまいなく勝手知ったる我が家のように倉庫の中へ入ってきた。

しばらく、俺の耳には穂積が床を掃く音だけが響いていた。

それは数秒だったかもしれないが、俺には何時間にも感じられた。なんで？

どうして？

クエスチョンマークだけが頭を埋める。

だけど、どれだけ考えてもなにも分からない。

——でも、それらは口に出してはいけないのだと、それだけがはっきりと感じられた。

屋根からは西日がスポットライトのように彼女を照らしていた。

それはまるで、童話に出てくるシンデレラのように見えた。

——だって、こんなにも幻想的で、こんなにも美しい光景だったなら、声を上げてしまったとたん夢から醒めてしまうから。

「……………」
「……………」

作業を始めて二十分が経過した。

相変わらず互いに言葉はなく、そろそろ気まずさが最高潮に達しようとしていた。

すでに何度奇声を上げてのた打ち回ろうと思ったか、数えるのも飽きてしまった。

ちなみに、夢はすぐに声を上げるまでもなく醒めた。アレが悪女であることを思い出したのである。がんばれ、俺。奴は悪魔だ。OK、俺。

「……………」

「……………」

今、奴はしゃがみこみそこいらに散らばった陸上用の小さなコーンを集めていた。

そして俺は奴が片付け終わった場所の砂を掃いて、倉庫の外へ出している。

無言でやっているにも関わらず、いやに連携が取れていた。そのおかげで作業はかなりはかどっていて、もう五分もせず終れるだろう。

「……………」

「……………」

しかし、はたしてこのまま終わってしまっているのだろうか。

この悪女が好意で、しかもよりによって俺を手伝うはずがない。

なにか目的があるはずだ。このまま帰して後になって、「バイト代、明日までにココへ十万振り込んで、クケケ」とか請求されるんじゃないだろうか。がくがくぶるぶる。

「そ、そんな気持ち悪い口調じゃないわよっ！」

「ヤッファー！ ついにやつちまったぜ！！」

緊張に耐えかねた俺の脳みそはついに主の命令を無視しだしたようだ。

背後からは穂積の立ち上がる気配がする。

なんだ？ 殴られるのか、俺は。

なんてビクビクしながらも穂積に背を向けたまま掃除を続ける。

くるならこい。先生に言いつけてやるっ。

「ねえ、山崎」

しかし、いつまでたっても拳は飛んでこず、声は俺の後方上、斜め四十五度の角度から投げかけられていた。

「え？」

振り向くと、そこには三メートルはある金属の棚に足をかけて登っている穂積の姿があった。棚の上が小コーンの置き場のようだった。

「ばっ！？ それは俺がやるから降りろ。その棚足がサビててあぶねーって」

「大丈夫よ。バカにしないで。……じゃなくて、さ」

「なんだよ」

言いずらそうに言葉をにごす穂積。その背中を眺めながら、言う。

「わたしさ、ここ最近あんたのことずーと見てたのよ」

「ああ」

知ってるよ、なんて余計な茶々は入れられなかった。

「だから分かるんだけどさ……」

少し、大きな棚が揺れた気がした。

穂積は自分の言葉を頭の中で反芻してから口にするかのように、ゆっくりと言葉をはいていく。

「なんで、その」

穂積の足が、棚の一番上に手が届くところまできた。高くはないが、棚のバランスを考えれば決して安全ではない。本人はそのことを本当に分かっているのか、のどに詰まらせた言葉を一生懸命紡いでいた。

「なんで、わたしのヒミツをばらさないの？」

パキッ。

「え？」

しかし、そこから紡がれた言葉は想定外もいいところで。しかも、なんだか妙なものが折れたような音がして。

「きゃああああー!!」

女の子の悲鳴。

「っ!!」

ドスン、と。

上から落ちてきたものの衝撃にうめく。

「え？ あれ??」

穂積はどこも痛くないことに違和感を感じているのか、首をかしげる。

棚自体が倒れてこなかったのはラッキーだった。

にしても、

「とりあえずお前、はやくどけ」

「わひゃあ!？」

よりにもよって、とつさとはいえこんな悪女を庇ってしまった自分の反射神経には恐れ入る。俺は、落ちてくる穂積の下でつぶれていた。

「ちょ、大丈夫?」

「いいから早くどいてくれええ」

なんか足が、足がとっても違和感なんだってば!!

しかし穂積は立とうとするも、生まれたての馬みたく再びストンと腰を落としてしまった。

「ぎゃーーーーー!!」

「あ、ごめん」

よりにもよって、違和感の元である足首に落ちてきやがった。しかも、どうやら腰が抜けてしまったようだった。

「あの、山崎。その……」

「バカ野郎! なぜわざわざそんなところに……!!」

「ご、ごめんなさい」

「早くどけ! 縞パン!!」

「!!」

パチーン。

穂積は俺の頬を思いつきりはたと、どこかへ駆けていった。
うおい、腰どうした。

「り、理不尽だ」

割に合わなさすぎる。

倉庫に独り残された俺のつぶやきが、さみしく響くのだった。

「捻挫ね。湿布はっておくから痛みが引かなければ病院行きなさい」
その後、俺は穂積の呼んできた体育教師によって救出された。
そして今に至る。

俺は痛む足を引きずりつつ廊下に出ると、保健室の扉を閉めるのだった。

ちなみに穂積の姿はない。

ついさっきまで一緒に居たはずなのに、いつの間に逃げたのやら。
やはり奴は性格最悪だ。

そんなことを考えながら、保健室に背を向ける。
と、そこには上下ジャージのさくらの姿があった。

「あり？ なにやってんだ、さくら。部活だろ」

ここの女子サッカー部はかなり活発で、毎日遅くまで練習があるのだ。

「サボってきた」

「……そこは嘘でも休憩中とか言ってほしかった。なんというか、お前の名誉のために」

あまりにも素直というか、正直すぎる幼なじみの物言いに肩を落とす。

それにしてもあの真面目なさくらがサボリとは珍しい。

「ユウスケが担がれていくのが見えたから心配してきてあげたのよ。感謝しなさい」

さくらは偉そうに腕を組みながら言った。

尊大な態度に頭痛がするが、こいつはこれで本当に心配しているのだから困る。

「で、どうなの？」

「ただ捻挫だ。大したことない」

「そう」

さくらはおもむろに俺の足首を蹴っ飛ばした。

「のあゝあゝあゝ！！」

「痛そうね」

「お前のせいだよっ！？」

「黙りなさい。ただの確認よ」

「なんの！？」

「本当に五月蠅いわね」

さくらは目を細めて俺のことを睨みつける。

まてまて、悪いのは俺か？

たまにさくらは俺のことが嫌いなんじゃないかと本気で落ち込む。

「送るわよ」

「え？」

「部活が終るまで待つてれば、自転車で送るわよ」

「あ、……うん」

そのくせ、たまにすごく嬉しいことを言ってくれるから、俺はいつもどう対応していいかドギマギしてしまうのだった。

「その足じゃあ歩きはつらいでしょう」

「まあ、な」

「まだ少しかかるけど、我慢して歩いて帰る時間はあまり変わらないと思うわよ」

まあ、間違いないだろう。

しかし練習で疲れているさくらの後ろに乗っていくのは気がひけた。

そんな時、廊下の奥の曲がり角からこちらを覗き見している穂積が、目に入った。なにやら頭を出したり引っ込めたりしながらこちらのことをうかがっている。なにをしてるんだ、あいつ。というか、バレてないつもりなのかあれ。

にしてもあの野郎、人に怪我させといて謝りもせずに消えたと思ったら覗き見かよ。

なんだか再び腹が立ってきた。

そうだ、こういう責任は引き起こした本人が取るべきだろう。それがいい、ついでに奴には引導を渡してやろう。くっくくく。

「ちよっと、聞いているの？」

視線を戻すと、さくらが不機嫌そうにしていた。

「あ、ああ。でも遠慮するよ」

「そう？」

「ああ、穂積に送らせる」

奴が以前自転車で登校しているのは確認済みだ。

「穂積さんに？」

さくらのまゆげが少しだけぴくりと動いた。

「ああ、まだ校舎にはいるはずだからな」

覗き見していた陰から頭は見えなくなっていた。もう駐輪場へ向かったのだろうか。急がないとまずいかもしれない。

「それじゃ……」

そういつて裏校庭へ向かおうとした。

その時、

「待つて」

さくらは俺を呼び止めた。

「どうした」

「いいえ、鈍感も度が過ぎると可愛いと思っただけよ」

そして、今度はフルスイングで俺の足首を蹴っ飛ばした。

「ギャーーーーー!!!」

「死ね。……………ばか」

さくらと分かれた後、皆の突き刺さるような視線を総身に受けながらも片足けんけんで校内をダッシュする。こっち見んな。

そのかいあつて、校舎の裏にある駐輪場にはまだ穂積の姿があった。

なにやら落ち着かない様子であたりをきょろきょろと見回している。

その姿は誰かを探しているようにも見える。なにやってんだ、あいつ。

しかしどうやらこちらにはまだ気がついていないようだった。この足ではせつかく見つけても自転車が相手では追いつけない。待ち伏せ、だな。

俺はけんけんで素早く校門へ回り込む。み、皆の視線が痛い。そして、駐輪場からは死角になる校舎の陰に身を潜める。

そこから慎重に奥を覗き込むと、

「……………」

「……………」

ちょうど角を曲がってきた穂積と超至近距離で目が合った。

「……よ、よう」

「……………」

一瞬の空白。

「キャーーーーー！！」

パチーン！

自転車が段差に乗り上げると、チリンとかすかにベルが鳴った。

「ほんつとにあんたバカなんじゃないのっ!？」

肩をいからせて自転車をこぐのは穂積だ。

俺はその自転車の荷台にまたがり、両手は必死で自分が腰掛けている部分を握っていた。

穂積の中ではさっきの出来事は俺が隠れて脅かしたことになる。実は俺もびっくりした、なんてのは内緒だ。まじ死ぬかと思っただ。心臓麻痺で。

ちなみに数分前、

俺は倒れた穂積の自転車を俺は起こしながら、

「乗・せ・ろ」

スカートについた砂を叩いて落とす穂積へ言い放った。

「……………いいわよ」

拒否しようたつてそうはいかない！

俺はここぞとばかりに畳み掛ける。

「乗せろつたら乗せろ！　そして俺を家まで送れ」

なぜならこの怪我の責任はこいつにあるのだから！！

「……じゃあ乗って」

「いや、貴様に拒否権はない。なぜなら………って、あれ？」

「おいてくわよ？」

すでに車体を校門へ向け、サドルに腰掛けた穂積はジト目でこちらを睨んでいた。

そして数分後。

自転車の前カゴには二人分の学生カバンが揺られているのだった。

「あんなところに隠れてるなんて、ほんと小学生並みっ。ガキよ、ガキ！！」

穂積はいまだに苛立ちをかくせずにいるらしい。

牛乳飲め。

「あんだのせいでしょ！？」

「否定はしない」

「肯定しなさいよ」

「素直になると死ぬ病気なんだ」

「死ね」

「……生きててごめんなさい」

あ、死んだ。

そんなこんなで自転車は快調に町を進んでいた。

「あ、そこ右で」

「次の十字路左」

なんて案内しつつ、道を進んでいく。

「ここの商店街を直進で」

「え？　う、うん」

そして、道を進んでいくうちにだんだんと穂積が首をかしげる数が増えてきた。

「あのさ、山崎の家ってこっちのほうなんだ？」

「そうだけど？」

「へ、へえ」

そして、とある小学校の前を通り過ぎたあたりで、俺はついに仕掛けることにした。

「なあ、穂積。小学校の修学旅行って覚えてるか」

「なによ、突然」

「いいから」

「まあ、少しは」

前方から、運転する穂積の戸惑ったような雰囲気伝わってくる。

「小学校の修学旅行っていうと日光行ったよなあ」

都内の小学校はたいてい日光だと、さくらに聞いたことがあった。

「……そうね」

「夜、部屋を抜け出したりもしたなあ」

「……」

「確か全部のクラスの男女が抜け出したんだよな、きもだめしって
いって」

「……」

「だんだん、黙っている穂積の雰囲気が変わってくる。そして、

「……な、んで」

「そうそう、それで結局一組の先生に見つかっちゃって、その後夜
中にホールで全員正座させられたんだよな。あれは傑作だった」

「なんで……」

「お前、一組だろ？ あの後大丈夫だったか？ ……あ、ストップ。
ここ、俺んち」

そういつて、中流家庭風の一軒家を指差した。

そして俺は捻挫していなほうの足で自転車から飛び降りる。

自転車は少し進んで止まった。

後ろから見る穂積の肩は、少し震えていた。

「なんで、あんたがそれを知ってんのよ……」

「のんのん。現実はいつかりと受け止めなきゃ駄目だぜ」

俺はこちらを振り向いた穂積に対し、得意になって腰に両手を当ててみせた。

「ださい三つ編みに、黒縁メガネの穂積さん？」

「うそ、だってそれ……」

ボタン、と穂積は自転車を倒した。

「俺はお前と同じ北小の卒業生だ！ 貴様がどんなにクールなカリスマ女を装たって、俺はお前の正体を知っている……！！」

「いやあああ——！！」

穂積は先ほどの生まれたての子馬よろしくストン、とその場に崩れ落ちた。

「うそつ、なんでっ、あんたっ」

穂積は顔を真っ赤にしてぶるぶると震えていた。

「な、ななななんで言ってくれなかったのよ。そうやって、わたしのこと笑ってたんだ！？」

「はっはっは」

自転車の横でまだ錯乱している穂積を立たせ、言ってる。

「だから言っただじゃないか。俺はお前の秘密を知っているぞ、って穂積はその瞬間、ピタリと口を閉じた。

目を見開いたまま、自分を落ち着かせるように何度か大きく息を吐いて、

「じゃ、じゃあ……。入学式の日に言っていた秘密って、このこと……なの？」

「そうとも！ なのにお前は俺のことをナンパ男扱いしやがって。だがなあ、俺は知っている。どんなにクールぶってたって、どんなにかっこよかったって、お前の本性は教室の端で本を読んでいるような地味子なのだ！」

わはは、言っちゃった！

ポカーン、と口を半開きにした穂積に指を突きつけ、俺はとうとう言いたかったことをぶつけてやったのだ。

……そのはず、だった。

「あ、……あれ？」

穂積はまるでかかしのように立ち尽くしていた。ただ静かに、まばたきだけをしていた。

そして、

「あの、……穂積、さん？」

声もなく、くしゃ、と顔を歪めた。

クラスで孤立した時でさえ歪めなかった顔を、歪めていた。

その一瞬で全てを後悔した。

俺はたぶん、触れてはいけないところへ触れてしまったのだ。

どうしよう。

……どうしよう。

「あ、あの……」

手が、宙をさまよう。

謝ってしまえ、と思った。しかし穂積は首を振った。今にも決壊しそうな表情のまま、俺の言葉を制した。そして、

「……ごめんね」

穂積が、俺に、謝罪したのだ。

待ってくれよ。今お前に謝られたら、俺はどうすればいいんだよ。

俺はただ、恥をかかされた仕返しができるばいと思っただけな

んだ。こんな顔するなんて分かっていたら、絶対にやらなかった。

誓ったつていい。穂積は乱暴で横暴で頑丈で、なにを言っても傷なんかつかないと思っていたんだ。

本当に、後悔していた。

だから待ってほしかった。

もう一度、やり直しをさせてほしかった。

だが、そう思った時にはすでにすべてが遅く、穂積は自転車をこぎだしていて、追いつけないところまで行ってしまっていた。

ごめん、そうつぶやいた時の憂いを含んだ顔が、初恋の少女のそれと重なって、より一層俺を苛んだ。さいな

気がつくとも目覚ましが鳴っていた。

「……寝れなかった」

布団の中から天井を見上げながらつぶやく。

俺はもやのかかったような頭のまま、起き上がった。

リビングへ出て朝食をとり、制服へ着替えて教科書をそろえる。

毎日のようにこなしているルーチンワークは何も考えなくても体が勝手にこなしてくれていた。

しかし会話はそうもいかないらしく、お袋はもとより親父にまで大丈夫か、などと聞かれてしまった。

寝てないせいか、顔色も相当悪いらしい。

その間考えているのも、全部穂積のことだった。

なんで俺があいつのことでこんなに悩まなくちゃいけないのか、少し腹が立ったがそれも自業自得だったことに気がついてよけいに腹が立った。

携帯をチェックすると悠矢からメールが届いていた。そういえば昨日電話に出なくてメールを送っていたのを忘れていた。

『バカの考え休むに似たり』

「……………」

とりあえず携帯を叩き付けた。

いや、布団の上にだけどさ。

気がつくとも俺は玄関で革靴をはいていた。

これから一時間もしないうちに穂積と顔を合わせるのかと思うと気が重かった。

『…………ごめんね』

あのたった一言が、とにかく尾を引いていた。

口悪く罵ってくればよかったのだ。そうすれば、俺はここまで

悩まずにすんだ。

少しだけ恥をかかせて、それでも噛み付いてきてくるあいつを口ゲンカをして別れる。それが俺の描いた穂積遥だった。そうすれば、俺はやっぱりやつは悪女で悪魔で、俺のことをたぶらかした悪者であると思えたのだ。

だが現実はどうだ。

完全に悪者は俺だった。

あいつは泣いたのだろうか。デリカシーのないバカ男の言葉に、枕を濡らしたのだろうか。

そんな穂積に、俺は今日どんな顔で会えばいいのだろうか。

「はあ……」

今日何度目になるかもわからないため息と共に扉を開いた。

「……お、おはよう」

「おはようございまーす」

春の清々しい木漏れ日が、少しだけ目にしみた。俺個人の気分なんてなんのその、今日もお天道様は絶好調だった。

「おはようってば……」

「おはようございまーす」

足の腫れは大したことないようだった。まだ体重をかければ少し痛むが、それでも時間をかければ歩いて学校に行くくらいなら大丈夫ぞ……

「おはようっ、って言うてるのに!!」

「うおう!？」

あわてて振り向くと、そこには自転車を引きいた穂積の姿があった。

「なんで無視するの」

「あわわ」

俺はついに悩みすぎで幻覚まで見るようになってしまったのだろうか。

震える手で自分の頬を思いっきりつねってみた。

「い、いふあい」

「なにやってるのよ？」

ジト目で睨まれた。

どうやら現実のようだ。

「でも、なんで穂積が……」

「見れば分かるでしょ」

穂積はベルをチャリチャリ鳴らして自転車を指す。

「見ればって……」

目の前では。自分の家の前に不機嫌な顔をした美少女が自転車にまたがっていた。

「待ってたのっ！……その、チャイム押すの恥ずかしくってっ」

つまり、穂積は俺のことを迎えに来たのだ。

俺はすっかり機能不全に陥っていた。

「い、いふあい」

「だから、なにやってるのよ」

「いや、夢かなと思って」

どうやら無意識に再び頬をつねっていたらしい。

そして穂積は朝日の中で唇を噛み、わずかに首をかしげて、不機嫌な顔で俺のことを睨みつけていた。しかし一度プイと横を向き、それからちよつとうつむいて、

「……乗って。後ろ」

次に顔を上げた時には、かすかに笑って見せたのだ。

なんで、なんて意味のない疑問はその表情だけで引っ込んだ。

朝から、いや昨日ここで穂積と別れてからずっと頭を悩ませていたことも、全部吹き飛んだ。

俺は吸い寄せられるように、自転車の荷台へまたがった。

「いくわよ！ 出発進行！！」

「が、がんばって」

「がんばる！」

でも、気まずくない、なんて言ったら嘘になる。

それでも、わずかに震える肩で穂積が普通を装うならば、それに

答えてやるのは男として最低限の義務だと思ったのだ。
自転車は軋みながらも、学校を目指す。

だが、この事件はこんなものではすまなかったのである。

「一緒に食べよう？」

「へ？」

今は昼休み。ようやく開放された授業に対しあくびをもらす暇もなく、突然前に座る穂積が振り向いた。

「だから、お昼。一緒に食べない？」

「……ちよつとまで。なんで、俺が、お前と、飯を食うんだ？」

「だめ？」

さびしそうにまゆをしかめて小首をかしげる穂積。

不覚にも少し可愛いとか思ってしまう自分が悲しい。

「ぐう。……り、理由がない」

俺はなんとかそれだけを搾り出す。

くそ、上目遣いは反則だろ。

「……理由」

一方穂積はなんだか本気で肩を落としていた。

までまでまでまで。なんなんだ、この展開は。送り迎いは分かる。こいつなりに昨日のことに責任を感じているのだろう。だが、それがどうして昼飯と一緒に食うことになるんだ？

「ナんだ、先約があつたのか？」

と、そこへ山田、田中、悠矢、さくらがやってくる。って、なんでさくら！？

「いや、ないない。ないって。さ、いつものところだろ？ いこーぜ」

「……山崎」

だから、なんでお前はそこで雨の日の捨て犬みたいな潤んだ瞳で俺を見つめるんだ。そんな目で見られても俺の家はペット禁制ですっ！

「……………」

そしてさくらはなぜかこちらへ無言の圧力をかけていた。なんなんだ、この凄まじい圧迫感は。

「ボクらは相川誘ってみたんだが、なんかお邪魔みたいじゃないか。いいよ、遠慮すんなって」

悠矢はその唇を醜悪に歪めて、のどの奥で笑い声を転がしていた。

「……………山崎い」

頼む、お前ちよつと黙れ。

「クククツ。じゃ、ボクらはお邪魔のようだから、さっさと退散するぞ」

「待て。親友だろ、窮地に陥った友を見捨てるのかっ」

「あら、女の子と二人きりのお昼がとれるチャンスじゃない、ユウスケ」

さくらの言葉にはなぜかとっても棘があつた。その無表情、とっても怖いデス。

「ジャーな」

そう言つて去ろうとする四人。

「ちよ、ちよつと待てって。俺も一緒に食うって!」

「遠慮しなくていいわ」

「遠慮すんな」

「遠慮はナシだ」

頼む、俺を一人にしないで。

そんな時、今までひとり場の空気においていかれていた田中が言った。

「なら、みんなで食べればいいんじゃないかな?」

裏校庭の一区画には天然芝が生えており、そこがいつも俺たちが

昼食をとるポイントになっていた。ここなら昼休み、飯を食った後に校庭で食後の運動をするのにちょうどいいのだ。

だが、今日はそんな運動をする時間はとれなさそうだった。

飯が、のどを通らない――！

今、俺の右にはさくら、そして左には穂積が座っている。さらにその横には田中、山田、悠矢。悠矢のとなりはさくらといったように、円になって並んでいる。

穂積の前には可愛らしい包みから取り出されたカラフルで旨そうな弁当が広げられている。

さくらの前にはなぜか男物の無骨で巨大なアルミの弁当箱。中身はハンバーグと海苔弁の二色弁当だった。うん、そうね、お前のお母さんはそういう人だった。良い人なんだけどね。

そして山田と田中も弁当。山田は自作だそうだ。

ちなみに俺と悠矢は購買のパンである。

それにしても大好物のカレーパンの味が全くしないのはどうしたことだろう。

昼食を始めてからこっち、なぜか妙な雰囲気がただよっており、パンはまるで粘土を食っているような気さえしてくる。

左を向くと、穂積と目が合った。なぜかテレたようにえへ、と笑って目をそらされた。

右を向くと、さくらと目が合った。なんだか初対面の時を彷彿するような、絶対零度を思わせる雰囲気漂わせていた。怖くなって目をそらした。

チキンて言うな。

前を見れば一見いつも通り、三人は雑談をしながら昼食をとっていた。しかしよく見れば悠矢と山田はちらちらとからかうような視線を送ってくる。そして田中は全くこの空気に気づいていない。

どうやら、この中で飯が旨くないのは俺一人のようだった。そんな時、

「とこ口で、山崎と穂積は付き合ったるの力？」

山田が爆弾を投下した。

「ぐはっ」

「はい、お茶」

その言葉にパンをのどに詰まらせる俺。そして気を利かせて自分の緑茶を渡してくれる田中。さ、サンクス。

そして一息つくと、

「……………」

「……………」

両脇からそれぞれとてつもなく膨れ上がった気配が俺を圧死させんとしていた。

「な、なんでそうなるんだよ」

俺は湧き上がる冷や汗を感じながら、それだけをしぼりだした。

「ナन्दつて、ナあ？」

「ああ、昨日は自主的に友介の手伝いしたかと思ったら、今朝は一緒に登校だろ？ 昨日の放課後になんかあったと思うのが普通だ普通」

「ぐ、なんで穂積が手伝いに来たこと知っているんだ……………」

「だってあの体育教師、お前が出て行った後すぐ来て手伝い募集してたぞ」

それを聞いて左を向くと、穂積と再び目が合った。

穂積は顔を真っ赤にすると、俺になにか食って掛かろうと勢いよく口を開き……………しかし突然周りを見回して口を閉じてしまった。そして今度は自分の弁当だけを見つめて、ぱくぱくと小さい口を動かしていた。

「ナんだ、公衆の面前でアイコンタクトなんて、やっぱり付き合ってるんじゃないか」

「なっ、ちがつ……………！！」

と、今度は穂積と言葉がかぶる。

それを見て悠矢と山田がクスクス笑う。

勘弁してくれ。俺だってわけが分からないんだ。

「なにかって、なんにもあるわけないだろ」

横目でちらりと確認すると、再び弁当だけの世界に閉じこもってしまった穂積に代わり、俺は言った。

なんなんだよ、まったく。

「ふうん、なんにもないのに女子と登下校できるほど、あなたがプレイボーイだったなんて私も知らなかったわ」

「だ、だってこの足は穂積のせいで怪我したんだがら、その分送ってもらうなんておかしくないだろ？」

てか、なんでこんな浮気現場押さえられた男みたいなことしなくちやいけないんだ！？ おかしい、やましいことなんてしてないはずなのに！

「ふーん、そうなのかもしれないわね」

全然納得していない口調だった。

「というかお前が説明しろよ！？ このままじゃ誤解されちまうぞ」さつきから妙に大人しい穂積に話を向ける。

しかし、

「……………え？ あ、うん。た、食べる？」

「んぐ」

穂積はなにかトンチンカンなことを言いつつ俺の口の中に卵焼きをつっこんだ。

突っ込まれた卵焼きはほんのり甘く、なかなかの美味だった。

「あ、うまい」

「……………そ」

穂積はそれだけ言うと、嬉しそうにわずかにはにかむ。かと思うと、再びお弁当ワールドへ帰っていつてしまう。だからなにがしたい、お前。

「ユウスケ」

その時、冬のすきま風よりも涼しい声が背後から聞こえた。

振り向くと、突然口の中に黒いナニカをつっこまれた。

突っ込まれたソレはどこか炭を連想させ、炭のようで炭っぽい味

だった。

「私が作った。感謝しなさい」

すみれさん（さくら母）、あれほどさくらに料理させちゃいけないと……言っただのに……。

「ま、まずい」

「死ね」

最後になんとか一言残して倒れた俺の後頭部を、ぐりぐりと踏み潰す革靴が追い討ちをかけた。やめて、死ぬ。

そんなこんなで最後まで悠矢と山田は痙攣するほど笑っていたし、田中はクエスチョンマークを浮かべていた。さくらはずっと原因不明の不機嫌だし、穂積はなんだか大人しい。だが、俺はこれで事件は完結したものだと思っていた。だってすでに俺のHPは0だったし、これが穂積の策略なら大成功といっていい。だが、穂積はこんなもので俺を赦してくれはしなかったのだ。

「本屋に行きたい」

「へ??」

「送っていくから、一緒に行こ?」

放課後。

穂積は可愛らしく首をかしげながら、そんなお願いをしてきたのだった。

頭痛がした。

昼のことといいおかしいおかしいと思っていたが、いい加減我慢の限界だった。

「やだ」

俺はハッキリと拒絶の言葉を放った。

理由がない、なんていうのは俺のヘタレ根性のなせる言い訳でしかないことは分かっている。でも、それにしたって理由がなさすぎる。穂積には失礼だが、ここまでくると騙されている気さえするのだ。

「なんでよ」

穂積はムスつとふくれた。勝気につり目で上目遣いににらんでくる。

うるせー。理由なんてあるか。

「やだったらやだ」

俺はカバンを肩にかつぐと、穂積に背を向けた。

しかし穂積もめげずに俺の前へと回り込んできた。

「あのなあ」

俺は呆れながら言う。

「お、お願い」

と、今度は下手にでる穂積。例のワンコオーラを放ちつつ俺に迫る。だからうちはペット禁制だったの。

だいたい、俺だって健全な男子高校生だ。こんな美少女に潤んだ瞳でお願いされて悪い気はしない。理由だのなんだのなんて気にせずほいほいOKしたい。

だが、

「なにあれ。クラスで浮いたから男作って逃げてやんの」

「どうせだれでもいいくせに」

「キモーい。同じクラスだと思っただけで鳥肌たつわ」

クラスのあちこちから聞こえてくるヒソヒソ声が、俺の返事をしぶらせ……

って、じゃねーよ！

そうじゃなくて！！

確かに今のこいつの状況には多少同情はするが、こいつは俺を騙した悪女なのである。そうだ、理由ならある。こいつは悪女なのである。

「あ、悪女ってなによっ」

「うっせー。お前は純粹だった俺を、三年もの長きに渡って騙し続けてきた悪女なのだ」

穂積はクラスメイトたちのささやきが聞こえないのか、なんとか歩き始めた俺についてきやがった。本来なら走って振り切れればいいのだが、あいにく今の俺は負傷中で並みの女子よりも歩くスピードは遅かった。

だから俺たちは昇降口に向かって、並びながらゆっくりと廊下を歩くかっこうになってしまった。

「こ、こんなにお願いしても駄目なわけ！？」

なんだなんだ、今度は怒り出したぞ。

それに、

「さつきからあんまり純粹にお願いされた気がしないぞ！」

「う、ごめんなさい」

今度はいきなりしゅんとしてしまった。

情緒不安定かよ。

「だいたい、なんで俺で、しかも本屋なんだよ」

「えっと、その……普通、かなって」

「普通？」

なにがだよ。

普通じゃないのはお前の頭な。

「……………」

穂積はそれだけ言うと、黙り込んでしまふ。

今度はだんまりか。

それにしても、こいつは気づいているんだろうか……。

「だいたいなあ、同じクラスの男女が私用で放課後に寄り道するこ
とを何て言うか知ってるか？」

「なに」

「制服デート」

男子高校生の永遠の夢、である。

「なっ……………!!」

瞬間、穂積の顔が面白いように沸騰した。

そしてなにかをこまかすジェスチャー（？）のように手をバタバ

タと振り回し、

「な、なななななんなわけないでしょ！？勘違いしないでよねっ」

へいへい、勘違いなんてしませんよ。

どうせそんなこったろうと思ってたし。

そのあとしばらく。俺たちは黙りあつたまま歩いた。どうやら穂
積は赤面癖があるらしく、顔をずっと赤くしたままうつむいていた。

そうして歩いていると、ようやく昇降口が見えてきた。

やれやれ。

「……………あ」

そしてそれは穂積にとって交渉時間が終わってしまったことを示し
ていた。

並んでいた穂積が急に足を止めた。

俺は、それを思わず振り返ってしまった。

「……ほ、本屋に、行きたい」

穂積は、震える声で最初の言葉を繰り返した。

いや、もしかしたら穂積の声は最初から震えていたのかもしれない。それこそ、クラスメイトの揶揄する声が聞こえないくらい、最初から緊張しながら俺のことを誘っていたのかも、しれない。

俺は居心地の悪さを感じながら、下校ラッシュを少し過ぎた昇降口を見回した。

穂積はうつむいたまま動かない。

俺は意を決し、言った。

「……ちよつとだけな」

顔を上げた穂積の、まだ少し赤みのさした笑顔は正直ちよつと可愛いと思ってしまった。

美人はズルい。

学校は駅から徒歩3分の場所にある。そして駅を大通り挟んでさらに奥へ進んだところにその大型本屋があった。うちからは逆方向とは言わないが、それでも少し離れたところにあるので今まで知らなかった。

そしてそれは地元が同じ（はず）の穂積も同じはずだ。学校とは逆方向、俺の家の近所には個人運営の小さな本屋がちゃんとあるのだ。それなのにこんな所を知っている、ということは穂積はよく本を読むのだろうか。

俺はそんなことを考えながら巨大な書店の中を漫画コーナーを探して歩き回る。

穂積は馴染みの店らしくよどみない足取りで奥のほうへと入っていった。

それにしても、穂積がなにを考えているかはサッパリだった。ここまで相変わらず自転車の荷台に乗つけられて来た。道中に会話はない。でも穂積の背中からは不機嫌な空気は見え、むしろどこ

か楽しげにさえ見えた。

そんなこんなをつらつら考えながら陳列されている漫画の表紙を物色していたが、何を見たのかなんて全く頭に入ってきやしなかった。

そして漫画のコーナーがそんなに大きいわけもなく、あっという間に一周してしまった。

手持ち無沙汰になってしまった俺は、仕方なく穂積を探すことにした。

店内を回ること数分。

穂積は推理小説のコーナーで立ち読みをしていた。

……小説、か。最近はずっかり読まなくなったな。

中学に上がっていこう、ずっと友達と遊ぶことに夢中になっていた。アウトドアだろうと、インドアだろうと、自分の遊ぶところには必ず他人がいた。運動するのも、ゲームするのも、漫画を読むのでさえ、自分の周りには三人以上は必ずいたのではないだろうか。そういえば、入学したてにも関わらず自分の周りにはすでに常時三人以上がいる。悠矢、山田、田中、そしてさくらの顔が浮かんで、少し笑えた。思えばこんな風に誰かと二人きりでどこかに寄り道をするなんて、いったいどれくらいぶりだろう。

思い出す、小学生の時。あの時の俺には時間をつぶすための手段はこれしかなかった。それを思い出すからだろうか。俺は無意識に小説を避けていたのかもしれない。

本棚の列から覗く穂積はなにが楽しいのかにこにこしながら様々な本を少し読んでは本棚に戻すを繰り返していた。どうやらこちらに気づいた様子はない。

それにしても、そこにいる穂積は俺の知る穂積とは全くの別人であり、同時によく知る彼女の姿だった。

ドクン、と自分の心臓が早鐘を打つ。

そこいる彼女の人懐っこそうな雰囲気、完全に自分の知っていた初恋相手の印象とかさなってしまったのだ。

まで、落ち着け俺。奴は暴力的で気が強くて思い込みの激しいタカピー女だ。お前の想いの人などでは決してない。それは勘違いだったんだっ。

「あ、山崎」

……でも、目の前にいる彼女が全てだろう？

「はう！？」

「ちょ、ちよつと、変な声ださないでよ」

「あ、ああ。すまん」

穂積は普段クラスでしているような不機嫌そうな顔で睨みつけてきた。

そうそう、その顔だ。

俺はあやうく再び悪女の毒牙にかかってしまうところだったぞ。深呼吸深呼吸。

「だからその悪女ってなんなのよ」

穂積はまだしかめっ面を作っている。

「なんでもない。こっちの話だ。……それより、なんかいいのは見つかったか？」

「まあまあね」

俺は穂積の物色していたあたりの棚をのぞいてみる。

「げ、お前こんな難しそうな読んでるのかよ……」

「ふふーん、あんたとは頭のできが違うのよ」

穂積は得意げににやりと笑う。表情がコロコロとよく変わる奴だ。まあ見ている分にはあきなくていいが。

「だいたいあんた、小説なんて人間さまの読み物読めるわけ？」

今度はくすくすと人を小馬鹿にしたように笑ってみせる。前言撤回、やっぱ腹立つわこいつ。

「あのなあ、俺だって小説くらい読んだことあるぞ」

最盛期で主に年間三百冊くらい。

それ以降はパツタリと読まなくなったわけだが。

「へへえ、どんなのよ？」

完全に疑っている顔だった。

ほんとむかつくな、こんちきしょう。

俺は自分の好きだった作家の名前を三人程度、言ってる。

だが、案の定穂積の反応は薄かった。当たり前だ、俺が当時読んでいたのは小学生あたりに向けた児童書ばかりだ。いや、意外と面白いんだって。バカにすんな。

それでも穂積の疑いは晴らせたらしい。

「すぐに名前が出るってことは、よく読んでる証拠だしねー」

うんうん、と頷きながらご機嫌な顔をしている。

どうやら読書仲間だと思われるらしい。人のことを疑つという調子の良い奴だ。

「う、ご、ごめんなさい……。怒ってる？」

そう言うのと途端にしておれてしまう。この間の平手打ち事件は夢か幻かと思わせるほどの打たれ弱さである。

「べ、べつに怒ってはねーけど……」

そのギャップに、俺は戸惑うしかなかった。
しかも、

「ほんとう？ えへへ」

なんて言って子供みたいい小さく舌を出して見せるのだった。

なんていうか、精神的に幼い感じた。

それにしても、

……こ、こんな奴だったのか。

今のは見てるこつちが赤面ものの恥ずかしさだった。俺は知り合に見られているんじゃないかと周りをきよるきよると見回してしまう。見るからに挙動不審だな、俺。それにしても、そんな恥ずかしすぎることですらなんだかさまになってしまふのだから、やっぱり美人はずるい。

俺はそんな思いを振り切るためにも、話題をそらす。

「お、俺もまた読み始めるかな」

そう言って、適当に一冊抜き取ってあらすじを眺める。

「そうしなさいよ、なんならオススメあるわよ」

「お、まじか」

とは言ったものの、今手にしている本のあらすじを見ていても全く興味は持てなかった。推理小説なんて、なにが面白いんだ？

「でも、読書はやっぱいいいわよね」

「え？」

そんな時、穂積がなにかを言った。

その言葉の持つ耳触りが、なんだかついさっきまでの穂積のものはと異質に感じられたのだ。

だから横に並んでいる彼女をまじまじと見つめてしまった。強い光を持った、しかし俺にはどこを見つめているのか分からない瞳がそこにはあった。あの時の顔だ、と思った。その瞬間、すぐ近くにいると思っていた彼女がどこか遠くへ転げ落ちてしまうような焦燥感が、俺の胸をこがした。

「本を広げれば、そこにはちゃんとした秩序を持った確たる世界があった、そこには血肉の通った人間がすんでいて、わたしのところをこんなにもしっかりと掴まえていてくれる」

彼女はゆっくりと、まるで愛しいラブソングを紡ぐようにして、語る。

それはたった今の今まで感じていた幼い印象を打ち破ってありあまる、さざつきのある声だった。

「孤独は、怖くないわ」

「こわく、ない……？」

彼女の語ったそれが、なぜその結論に行き着くのが俺には分からなかった。いや、俺は知っていたからこそ、分かりたくなかった。だって、どうして、よりによって彼女がそこにたどり着かなければならなかったのかが分からない。

「わたしにはわたしの世界がある。だからわたしは孤独が怖くないの」

「それは……」

それは違う、と反射的に言っけししまいそうになっけ、俺はあわてて口をつぐんだ。

そんなことを言っけでどうする。

彼女は俺とは違っけ。

違っけんだ。

穂積が怖くないと言っけ以上、きっけそれは怖くないのだ。

ただ、俺の心中は複雑だった。

孤独が怖くない、なんて言葉は大嫌いだった。

だから代わりに、

「それで、お前は楽しいのか？」

「ええ、楽しいわ」

自分の疑問をぶっけた。

そして、それは即答だった。

だから俺は納得することにした。

「ていうかなによ、それ」

「なんだよ、変かよ」

「変よ。あんた、変わっけるわ」

そう言っけ、穂積はくすくす笑いながら俺の肩を遠慮なくぶっけたくのだった。

「痛っけえな、なにすんだよ」

「あはは」

そこにいるのは暴力的で気が強くて自意識過剰なクラスメイトだった。

結局、その後さらに一時間も書店で時間をつぶした。俺が昔読んでいた児童書も見っけ、バカにする穂積にむりやり買わせてやっけ。店員や他の客が露骨に嫌な顔をするくらいの大暴れだったが、なかなか楽しかった。ほんとすんませんでした。

ただ俺はずっけ気になっけていた。

嫌だ嫌だと叫びながらも買っけた後はそれを大事そうに抱えていた穂積のことが。

気が強く口の悪い穂積と人懐っこくて幼く笑う穂積。
いったい、本当の彼女はどちらなのだろうか、と。

お詫び文

えー、お詫び文です。

なんていうか、思いつきで「ツンデレ書こう！」と過去二度ほど思い立ち、二度ほど失敗いたしました。どうやらさっぱり更新しなくなっただけで、覗いてくれている方がいるようなので、こうしてお詫び文を書かせていただいています。本当にすみません。両作品とも続きはあるにはあるのですが、ほぼ間違いなく……いえ、間違いなく完成いたしません。読んでくださった方、感想をくれた方、本当に申し訳ありませんでした。突然作品を削除するのはここまで読んでくださった方に失礼だと思いましたので、最低でもあと一ヶ月はこのまま晒しておこうと思います。これからは、公開した作品はを未完で削除する、なんてことにはならないよう、しっかりとしたいと思います。本当に、申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7310d/>

ツンデレ（仮）

2010年10月8日14時40分発行